

① 迷里と同一であると見て居るが、これは別に證據の無い限り確かには定め難い。

② *Mediæval Researches*. II, p. 20.

③ *Cathay, new edition*, III, 265. note 2.

④ *Ibid.* I 140.

⑤ Pelliot. *A propos des Comans*. J. A. 1920, p. 181; *Notes sur anciens noms de Kuçâ, d'Agusu et d'Üc-Turfan*.

*T'oung pao*, 1923. p. 127.

⑥ 斷簡には *ilb är* と記されてあるがこれは勿論誤寫に相違ない。この斷簡には王といふ語を *ilig bäg* と書いて居るが、例へば前に引いた別面第六―第七の如くであり、またこの面の第二行にも同様に記されてある。それでこの *ilb är* は、れ等の *ilig bäg* か、もしくは *ilig är* に相違ない。 *ilig är* 即ち「王人」といふ語は余の初めて遭遇するところであるが、かゝる語も用ゐられたのかも知れない。最も普通には「王」に對して“*ilig xan*”といふことは周知のことである。

⑦ Le “*Tokharien B.*” *langue de Koutcha*, J. A. 1913.

⑧ *Sieg & Siegling. Tocharische Sprachreste*. Seite IV.

⑨ *Sten Konow. Khotan Studies*. J. R. A. S. April 1914.

⑩ *Barthold. Turkestan*, pp. 388-389; *Chavannes et Pelliot, Un traité manichéen*, p. 270.

⑪ F. W. K. Müller, *Zwei Pfahlinschriften aus den Turfanfunden*; *Der Hofstaat eines Uiguren Königs*; *Le Coq. Manichaica* 中、特にその第三卷に收めたる諸斷簡等。

⑫ 「元之哈密力」の五字は通行本待行記には見えないが、今新疆圖志の引く所に従つて補つて置く。

⑬ 「爲」字も前項と同様である。

⑭ Pelliot. *A propos des Comans*, J. A. 1920, p. 181.